

## 開会のことば



### 猪狩 淳

いがり じゅん

順天堂大学 名誉教授/  
三菱化学メディエンス 顧問

1964年 順天堂大学医学部 卒業  
1965年 順天堂大学医学部臨床病理学講座 入局  
1985年 琉球大学医学部保健学科臨床病理学 教授  
1991年 順天堂大学医学部臨床病理学 教授  
順天堂大学医学部附属病院 臨床検査部長  
2001年 順天堂大学医学部附属浦安病院(現順天堂  
浦安病院) 院長  
2004年 順天堂大学 名誉教授, 現在に至る.

三菱化学メディエンスフォーラムの企画ならびに世話人会を代表して、開会のご挨拶を述べさせていただきます。

三菱化学メディエンスフォーラムは今回で6回目を数えることとなりました。これまでの5回のフォーラムでは、その折々に話題になった感染症を取り上げて、皆さまとディスカッションを重ねてまいりましたが、今回も最近話題になっている感染症の中から、「診断・治療に苦慮する感染症」と題し、薬剤耐性肺炎球菌感染症、淋菌感染症、麻疹の3つを取り上げることにしました。この3つの感染症に関するご講演を拝聴する前に、現在の感染症とその診断・治療の現状について簡単に述べ、「開会のことば」に代えたいと思います。

感染症の歴史は古く、多くの先達の優れた研究によって未知の病原体が次々と発見されてきました。一方、これらの病原体の検出法や治療法の進歩にも目を見張るものがあります。

しかしながら、このような進歩によって感染症学の確立は完全なものとなり、感染症は克服されたかに見えますが、決してそうではありません。現在もなお多くの課題を抱えています。治療の進歩につれて、薬剤耐性をはじめとする病原体の変異や易感染性宿主の増加などがその代表として挙げられるでしょう。また、診断技術の進歩にもかかわらず、いまだに明らかにされていない病原体が存在することも事実です。

感染症は時代とともに変貌を見せています。数々の新しい抗菌薬が開発されたにもかかわらず、抗菌薬に対する耐性菌が相次いで出現しました。そのみでなく、新しい耐性機構を持つ変異株が出現し、それがまた抗菌薬の多用と相俟って台頭しています。

感染症の大きな課題の1つは、易感染性宿主、すなわちコンプロマイズドホストにおける感染症の治療ではないでしょうか。今日、臨床医学の進歩により、重症の基礎疾患を持ちながら生存している症例が増えています。これら易感染性の症例の増加、抗菌薬の多用傾向、さらに多剤耐性菌の出現が重なり、感染症は難治化の傾向を示しつつあります。

難治感染症の対策は、優れた抗菌薬の開発はもちろんですが、病原体診断の迅速性と、診断法の感度、特異度を上昇させること、これらが達成されて初めて早期診断、早期治療が可能となり、治癒率の向上につながるからです。

病原体によっては感染症の早期診断、早期治療が難しいものもあります。そのため、迅速診断法の開発が続けられています。その中には病原体由来の抗原を臨床材料から直接検出する免疫学的方法や、DNAプローブ法、PCR (polymerase chain reaction) 法などの核酸検出法があります。しかし、臨床材料の中には抗原や核酸が検出された微生物を起因病原体と即断することには慎重でなければなりません。この種の検査法は正しく用いられてこそ早期診断に極めて有用となるのです。

今回のフォーラムも、このような感染症の現状と診断・治療の問題点を念頭に置き企画されました。お集まりいただいた皆さまにとって、このフォーラムが有意義であり、かつ実りあるものとなることを期待しております。どうか最後の「総合討論」までこのフォーラムをお楽しみいただき、皆さまの明日からの日常診療に少しでもお役に立てばと念じております。